アート＋文章書き　藤田千彩
&
アートプラス株式会社

Art + Writing　Chisai Fujita
&
Art Plus inc.,

info@artplus-inc.com
artpluschisai
千彩4649

2022 Sep.version

藤田千彩
Chisai Fujita

文章書き、翻訳通訳、研究
writing, translating and research

主に2000年代以降の現代美術について
about contemporary art, 2000s in Japan, 2010s in Asia

京都精華大学、愛知県立芸術大学、広州美術大学、深圳大学などでレクチャーも行う
Lecturer at Kyoto Seika University (Japan), Aichi University of Arts (Japan), Guangzhou art university (China), Shenzhen University (China)

HSK(汉语水平考试, Chinese Proficiency Test) Level5
Now, Kyoto Shinmei Korean language school student

ART+

アートプラス株式会社
Art Plus inc.,

2010年に東京新宿で創業
Established in 2010 May in Tokyo, Japan.

主な業務内容は、アートに関する執筆、書籍編集、案内（ガイド）等、
これまでの藤田の経験およびノウハウを生かした活動を行っている。
Business Details; writing, translation, guide etc. for art.

ライティング＆翻訳　　Writing and Translation

「ART SCRUM」

ラグビーの国際大会にあわせて、ラグビー経験のあるアーティストがラグビーボールを使って、作品を制作。
その展覧会カタログで、インタビューの執筆（日・英）、翻訳（英語）を行った。

Chisai Fujita and Art Plus had interviews artists,
wrote and translated the articles in Japanese and English.

仕様　Specification
B5 size, 42 pages

発行　Published
三菱地所株式会社、公益財団法人彫刻の森芸術文化財団
Mitsubishi Estate Co., LTD
and Chokoku No-Mori Foundation

発行年　Year
2019

価格　Price
1,000 JPY

小澤 征爾 × 坂 茂 対談

坂: 以前、小澤さんとラグビーの話になって、僕が成蹊出身だと伝えたら「俺は成城で、成蹊が憎いんだ」と。

小澤: そう。もともとピアニストになるつもりだったのに、成蹊とのラグビーの試合で、指を骨折して、ピアノをあきらめたんです。

坂: ラグビーは、なぜ始められたんですか。

小澤: 中学時代、松尾勝吾っていう、昔ラグビー選手をしていた松尾雄治さんの親戚にあたる人がいて、そのクラスメイトの影響でクラスの皆で休み時間はラグビーをしていたんです。

坂: 骨折の後、ピアノをあきらめられて、指揮をなさったんですか。

小澤: 当時の僕のピアノの先生が豊増昇という先生で、相談したら、「小澤くん、指揮という手もあるな」と言われたんです。当時まだ指揮なんて知らなくて、家に帰って、おふくろに伝えたら「親戚に齋藤秀雄という指揮者がいる」と手紙を書いて、持って行って、指揮を始めるようになりました。

Ban: We've once talked about rugby before. I told you I was from Seikei Junior High School and you said "I am from Seijo Junior High School (Seikei's rival) and I hate Seikei."

Ozawa: Yes, I was going to be a pianist but during the matchwith Seikei, I broke my finger, so I had to give up playing the piano.

Ban: Why did you start plyaing rugby?

Ozawa: One of my classmates from junior high school, Matsuo, was a relative of a famous rugby player, Mr. Yuji Matsuo. He made the whole class play rugby during break time.

Ban: After breaking your bones, you gave up becoming a pianist and started conducting?

Ozawa: My piano teacher at that time, Mr. Noboru Toyomasu, advised me "you can do conducting." But I didn't know anything about

SEIJI OZAWA × SHIGERU BAN TALK ABOUT

坂: 試合で骨折しなかったら、指揮者としての世界のオザワは生まれてなかったんですね。

小澤: まぁ、指揮者にはなってなかった。

坂: ラグビーは続けようと思わなかったんですか。

小澤: 隠れて、やっていました。

坂: 中学1年のときからいつまでラグビーをなさっていたんですか。

小澤: 高校では辞めていたので、3年間。

坂: 小澤さんはどこのポジションだったんですか。

小澤: 3番(右プロップ)。あなたは?

坂: 僕は8番(ナンバーエイト)です。

小澤: エリートだなあ。

坂: いやいや、3番って大変ですよね。

小澤: 大変ですよ。それでも試合が終わってから、あれ?ボールに触ったか?と思うほど、ボールに触らないんです。3番は通り抜けていくから。

坂: 音楽家でラグビーをしている人って、僕は聞いたことがありません。

小澤: 俺も聞いたことない。だからラグビーの話なんて、音楽仲間と絶対しないですよ。

坂: 話をする人はいないでしょう、ラグビーをしたことがある人がいないんだから。

小澤: あなたとラグビーの話をしていると、楽しいね。

坂: ありがとうございます。ぜひ試合を一緒に見に行きましょう!

小澤: ぜひお願いします。

it. I told my mother, and she wrote a letter saying "Mr. Hideo Saito, conductor, is our relative." I brought the letter to the teacher and started learning.

Ban: If you hadn't broken your bones, the world's conductor Mr. Ozawa would have never been born.

Ozawa: Well, I wouldn't have become a conductor.

Ban: You didn't want to continue playing rugby?

Ozawa: Actually I did it secretly.

Ban: How long did you play rugby?

Ozawa: During junior high school, for 3 years.

Ban: What position were you?

Ozawa: I was the 3 (tight-head prop). You?

Ban: I was the Number 8.

Ozawa: You were an elite!

Ban: No, no… but 3 is hard.

Ozawa: Yes, it was. But at the end of the game, it was always like "huh? Did I touch the ball?" The ball often passed me by.

Ban: I have never heard of a musician playing rugby.

Ozawa: Me, neither. That's why I have never talked about rugby with my musician friends.

Ban: Of course not! No one playsrugby.

Ozawa: It's fun having a conversation about rugby with you.

Ban: Thank you so much. Let's go to see the matches together.

Ozawa: Definitely.

KOHEI NAWA

Flesh-Ball

ブロンズ / bronze / 195×295×195mm (2019)

©Kohei Nawa / Damien Jalet

15年間プレーしたラグビーは思い出だらけです

The 15 years of my rugby life is full of memories.

ラグビーの思い出

中学の部活でラグビー部に入ってから大学のOBチームまで、15年間プレーをしたので、思い出だらけです。高校時代のチームは比較的強く、63人もいる組織で、僕は副キャプテンをしていました。京都市立芸術大学の合格発表を見に行ったとき、合格の番号を見つけてガッツポーズをした瞬間に、後ろから肩を叩かれて「名和さんですよね、ラグビーをされてたようですね」と、ラグビー部から勧誘を受けたことを覚えています。1学年は3人ぐらいで、ラグビー経験者も限られていて、高校時代とのギャップを感じましたが、非常に楽しい部活動でした。

作品について

ラグビーボールは、楕円の形が安定しすぎていて、そのまま彫刻作品にするのは面白くないと思いました。いまベルギーの振付家ダミアン・ジャレとコンテンポラリーダンスのプロジェクトをしています。そのなかでも、肉体だけでかたまりをつくるというスタディから着想を得ました。ラグビーは男子も女子もあるので、男性も女性も肉体が絡み合うように、顔の見えない匿名的な身体だけでボリュームをつくり、ラグビーボール型の彫刻として見せています。

Memories of rugby

There are so many memories from playing rugby for 15 years, from junior high school up until my university alumni team.
The high school team was strong and was a huge group with 63 people. I was an assistant captain. When going to see the announcement of the result of the examination of Kyoto City University of Arts, the moment I found my number, I raised my fist in triumph. At the same time, someone hit my shoulder and asked me "Are you Mr. Nawa? Have you played rugby?" and I was invited to the rugby club.

About the artwork

I am recently doing a contemporary dance study with Belgian choreographer Damien Jalet and got an idea from there. There are both boys and girls teams in rugby so I made a sculpture using a form of a rugby ball appearing as if the body tangles men and women with various anonymous bodies.

名和 晃平 彫刻家

京都市立芸術大学 ラグビー部 スタンドオフ 10

中学時代の部活動としてラグビーを始める。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。中学から大学のOBチーム含めて、合計15年間プレーを行い、ポジションはずっとスタンドオフ。

KOHEI NAWA Sculptor

Kyoto City University of Arts, Rugby Club, Fly-half (10)

Started rugby since the club activities in the junior high school. In 2003, completed a sculpture course at the Graduate School at the Kyoto City University of Arts. His position was always Fly-half (10).

KATSURA FUNAKOSHI

あの頃のボールをうら返した。 / Memories held by a ball, turned inside-out.

革、糸、楠、バネ、水彩、鉛筆 / leather, thread, camphor wood, spring, watercolor, pencil / 420×470×670mm (2019)

幼稚園のときからラグビーはあこがれのスポーツでした

I longed for Rugby since I was a kindergarten student.

ラグビーに対する思い

幼稚園の頃から、同じ敷地内にある高校の生徒が、ラグビーの練習をしているのを見ていました。あこがれのラグビー部に所属した高校を卒業して50年ほど経つ今でも、チームメンバーとは毎年2回会っています。試合中の細かな出来事や打ち明け話をしたり、一生忘れない思い出ばかり。大学、大学院に進学してもラグビーを続けたおかげで、ひとつひとつ理解しながら練習してマスターし、表現できるようになることをラグビーから教わりました。これは、作品制作にも生かされています。

作品について

以前制作した、人間の大事なものや必要としているものを身体に着けるという作品のコンセプトを基にしています。ラグビーボールは4枚の革でできていて、それぞれ切り抜いて、人物や動物、森といったものを立たせていこうとしました。ラグビーボールを裏返したのは、人間が大事にしたいものがボールに詰まっていて、裏返したらいろんなものが出て来るというイメージからです。

What is your passion for rugby

Even after about 50 years since high school graduation, I still meet with my team members twice a year. I have some unforgettable memories with them, such as when I had a brain concussion during the game, and also had confidential talks with them. Thanks to continuing the rugby even after entering the university and graduate school, the sport taught me the importance of working hard to make something from nothing in the production of art.

About the artwork

It is based on the concept of the work I made before, attaching to the body, important things for humans. A rugby ball is made of four pieces of leather, and I made it so that each cut out —person, animal, and forest —appear. I decided to make the rugby ball inside-out, because humans stuff things of importance inside the ball, and here they can come out.

舟越 桂 彫刻家

和光学園、東京造形大学、東京藝術大学大学院
ラグビー部 右センター 13

幼稚園の頃から、同じ学校の敷地内の高校生のラグビーの練習を見て育つ。東京造形大学3年次に我慢できなくなり、ラグビー部を創立。東京藝術大学大学院に進学してからもラグビーに親しみ、卒業した後もOBとしてラグビーを続ける。国内外の美術館で展覧会や作品所蔵がある。

KATSURA FUNAKOSHI Sculptor

Waka Gakuen, Tokyo Zokei University,
Tokyo University of the Arts, Rugby Club, Outside centre (13)

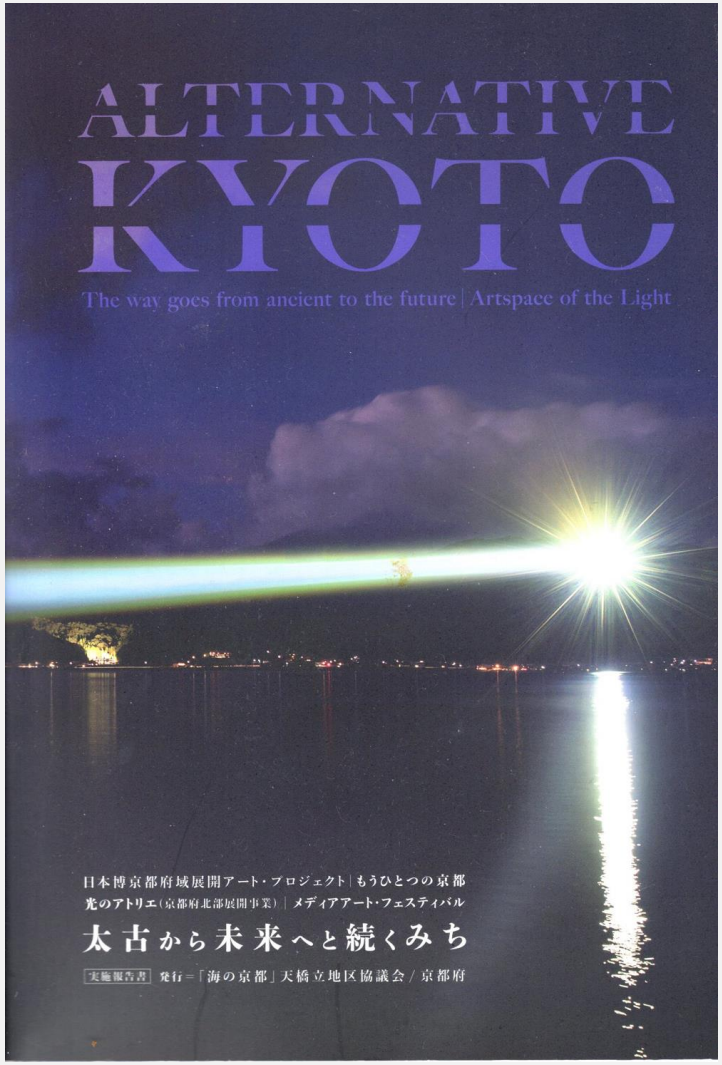
He played as the founding member of Tokyo Zokei University Rugby Club, and after graduating from the Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts. Some international museums have exhibited and also collected his works.

ライティング＆翻訳　　Writing and Translation

「ALTERNATIVE KYOTO」(日本博京都府域展開アート・プロジェクト「もうひとつの京都」)

文化庁「日本博」の京都府での開催記録集および報告書。京都府内にある有形文化財や名勝舞台に、デジタルアートプロジェクト「光のアトリエ」を展開。取材をもとに、テキスト執筆およびその翻訳を行った。

This is report of “Japan Cultural Expo in Kyoto”. It showed New Media Art works in several heritage in Kyoto prefecture. Chisai Fujita visited there, wrote the articles and she and Art Plus translated it Japanese to English.



仕様　Specification
B5 size, 24 pages

発行　Published
「海の京都」天橋立地区協議会、京都府
Kyoto prefecture
and “Umi no Kyoto” Amanohashidate committee

発行年　Year
2020

価格　Price
Free

天橋立公園内
Amanohashidate Park

原 摩利彦 / 長町 志穂
Marihiko HARA
Shiho NAGAMACHI

《天橋立公園内 砂浜ライトアップ》

日時＝ 2019年7月13日［土］- 9月30日［月］
19:00-22:30
公場＝ 天橋立公園内
音楽＝ 原 摩利彦
照明＝ 長町 志穂

天橋立の砂浜を、音風景から立ち上がる質感/静謐を軸に制作活動を行っている原摩利彦、光の環境をデザインする照明デザイナー長町志穂による音と光の演出で幻想的な世界に創り上げた。

砂浜は感性を揺さぶる異空間となった

天橋立公園は、天橋立駅から徒歩10分も掛からない砂浜一帯で、静かに内海からの波を感じることができる場所である。

私は午後6時ごろから、この場所に立っていた。夏は日が落ちるのがとても遅い。私の周囲が徐々に暗くなるのと反比例して、目の前の砂浜を作品の光、色のついた光が照らしている。午後6時にその光はまだ空気のようにまだ淡く、色が砂浜に付くまで時間が必要だった。時間の経過とともに、私を取り巻く空気に、目でも分かるような色がついていく。ここに来た人たちの顔がお互い見えなくなるほど、完全に空が暗くなったのは夜8時ごろだった。

そこでようやく完全なインスタレーション作品として、この光を体感することになる。約600メートルにわたる長い砂浜から沖に向かって、大きな投光器が多様な色を紡ぎ出す。青やピンク、だいだいや紫の色が付いたこの光は、照明デザイナーの長町志穂によってもたらされた。私は自分の目で、色のある光を追った。砂浜を照らし、空間を変容させる3分間の鮮やかな光の動きは、自由に踊るダンサーのようだった。

同時に、粒がしたたるような心地よいサウンドが私の身体を包んでいた。投光器に付けられたスピーカーから届くサウンドは、原摩利彦によるもので、浜辺全体に響き渡る。光ある浜辺に立つ私たちは、そのサウンドも全身で受け止めなくてはいけない。

まだ日が明るいうちから暗くなるまで、それらは10分ごと、光と音がある状態とない状態が断続的に続いて行くため、滞在する時間とともに変化していくのを楽しむことができる。

私はいま、ただの浜辺にいるのではない。

これまで感じたことがない感性を揺さぶる異空間に変容した天橋立のさまは、美しさと怪しさをもって、私たちを包んでいた。

文：藤田千彩

Beach appears as different space when senses are engaged

The "Alternative Kyoto" venue known as Amanohashidate Park is a short 10-minute walk from Amanohashidate Station. When I arrive, the sandy beach of Amanohashidate Park greets me with calm waves from the inland sea.

Arriving around 6pm, the sun is still slowly moving towards the horizon, painting the sky on its way to sunset. By 8pm the sun has gone, yet somehow the sand is again painted with blue, pink, and deep purple light. The light comes in pulses along the beach, painting itself and then un-painting again, slowly in a way that is both eerie and beautiful. As time goes on, and the sky becomes so dark that beach-goers can not see each other's faces, the air around me will also be colored.

At last, one can discover that the light is from a large installation, the lighting design of Shiho Nagamachi, where large flood lights throw light from beach towards ocean. These swaths of multi-colored luminescence — now blue, pink, orange, and purple — span the entire length of this 600meter beach.

I stand and look out into these colored lights. They illuminate the sand in a way that brings us into a different dimension. Though the spotlights do not move, somehow the beach is animated, it comes alive with movement as if dancing.

Synchronized together with the light, a comfortable sound, like a musical blanket of raindrops, wraps my entire body. This sound is the work of composer Marihiko Hara. The sound is resonated throughout the beach. As we stand here with the light and sound, we feel an experience that is received through our whole body.

The light and sound can be seen from sunset time into the night, a three minute experience that repeats intermittently every seven minutes.

Though we are standing at the edge of the sea in Amanohashidate, this is not a normal beach. We have never experienced this place before. It has been transformed into a time and space that illuminates not just the beach, but the unknown and unseen.

In this moment there is a beautiful yet suspicious feeling within me, that I am in another world.

Written By Chisai Fujita

通訳　　Translation

Bibi CALDERAROさんのリサーチ補助としての通訳
Translator for Bibi CALDERARO’s research

日本学術振興会(JSPS)外国人特別研究員として総合地球環境学研究所(RIHN)に滞在、リサーチで来日したニューヨーク在住のアーティストBibi CALDERAROさん。彼女の目的である「気候変動」や「里山」をリサーチするため、共に新潟県の越後妻有地方へ行き、約10人の地元民へのインタビューを行った。その際、通訳を担当した。

Artist and JSPS Postdoctoral Fellow, Bibi CALDERARO living in New York who came to Kyoto, Japan for research. She stayed at Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) and researched “climate change” and “Satoyama”. We went to Echigo-Tsumari, Japan together because of interview. She met about 10 people and Chisai translated them.

時期　When
2022年7月

研究　Research

2000 年以降の現代美術 (1)：國府理《虹の高地》にみる作品のありかた
Contemporary Art Scene since 2000 (1) –Analysis for Osamu Kokufu's "Highland under the Rainbow"-

愛知県立芸術大学紀要45号（2015年度）において発表。彫刻家・國府理の《虹の高地》が、ギャラリー（ホワイトキューブ）、（借景がある）美術館、真っ暗の地下室、屋外のそれぞれ異なる空間に置いた場合、作品はどのように見えるか、アーティスト自身はどう感じるかを検証した。

This article has Aichi University of Arts Bullen Vol.45 (2015). Sculptor Osamu Kokufu's "Highland under the Rainbow" represented different four types spaces; gallery (white cube), museum (with landscape), basement and outside. In different spaces, what do the viewers see it and what does the artist think it? I think it in the article.

2000 年以降の現代美術（1）—國府理《虹の高地》にみる作品のありかた—

作品《虹の高地》について

本稿で論ずる作品《虹の高地》（英語名：Highland under the Rainbow）は、2008 年に制作、発表された。

《虹の高地》 2008 年　自動車、苔、噴霧器　145 × 165 × 420cm 「國府理展」アートスペース虹　撮影／シュヴァーヴ・トム

大学時代の恩師でアーティストの野村仁に誘われて、1999 年、ソーラーカーによるアメリカ大陸横断旅行「HAAS プロジェクト」に、國府は参加した。帰国後に手にした雑誌[2]で、米空軍のキティンジャー大尉が高度 3 万 1300 メートルからパラシュート降下をした記事に衝撃を受けた。「俯瞰的な観念を持たなければ地球がどんな形をしているのか、日本とはどんな国家なのか、筆者はどんな人間かわからないのだけれど、土や海の養分と空気と水から生まれた人間はやはり地上に暮らさなければならない」[3]と気づいた國府は、自動車にアレンジを加えるようなそれまでの制作手法から一転、自動車自体をひっくり返し、さらに植物という新しい要素を加えることを試みた。それが《虹の高地》である。「白くツヤのあるボディとは異なり、凹凸（おうとつ）のある底面が露わとなる。さらにその底面に苔を張り巡らせると、あたかも谷や山のような自然の風景に見え[4]」たことは、國府にとって新しい展開となった。それまでも植物を素材の一部に使っていたものの、本格的に植物を取り入れ、その成長も作品の一部としたことは、三次元の立体作品に「時間」という別の次元を可視化していくことになった。それだけでなく、國府にとってこれまで主な作品素材だった自動車あるいは機械類が不変的な物質だったのに対し、伸びたり枯れたりと可変する植物ないし自然物は、彼の表現や作品が持つ意味の幅を広げた。

鑑賞者の立場からすれば、風景画のように自然風景を描写した作品ではなく、生命の営み（ここでは植物そのもの）を作品として直接見せつけられることで、世の中や世界を相対的に考えるきっかけとなったはずである。しかし植物は害虫を招きやすく、通常、美術館では展示できないことが多い。そのため《虹の高地》のような作品を、恒久的に所蔵することはあり得ない。ひいては國府理というアーティストや作品の存在もなくなってしまうことも意味しているのではないだろうか。

– 49 –

仕様　Specification
B5 size, 10 pages (Japanese)

発行　Published
愛知県立芸術大学
Aichi University of Arts

発行年　Year
2016

https://cir.nii.ac.jp/crid/1390853649825264768

研究　Research

2000 年以降の現代美術 (2) のための考察
Consideration for “Contemporary Art Scene since 2000(2)”

日本台湾学会関西部会において、論文およびPowerPoint資料を発表。作品が置かれた空間のみならず、近年台湾人アーティストは、日本統治時代での遺跡・遺物や移民における国レベルの問題・話題など、空間を越えたテーマやコンセプトを作品に取り込んでいる。それを日本人である藤田がどう考えるべきか、鑑賞とは何かを検証した(他にも、アートフェアや国際展についても触れている)。

This is presented by The Japan Association for Taiwan Studies, Kansai branch. Recently Taiwanese artists have some problems; Japanese colonial era, after colonial era, immigration etc. Japanese Fujita saw them, how do I think? What is “appreciation of artworks”? The article has it and about art fair and biennale.

仕様　Specification
PDF (Japanese, Chinese and English)

発行　Published
日本台湾学会
The Japan Association for Taiwan Studies

発行年　Year
2021

展覧会タイトルにあるように「新住民」をテーマにしている。この作品で郭はベトナムからの新住民を取り上げ、コラボレーションした。ベトナム産の木は、台湾でタンスやテニスラケットとなって、自分たちの生活の一部となっている。部屋の中では、郭とベトナムの新住民の朗読が流れている。つまり、台湾にとって新住民は身近な存在であり、協働していることを示している作品なのだ。

高雄出身の丁昶文にとって、映像に映る「キナ」の木は身近に生えている木である、と言う。

丁昶文《Virgin Land》「2019 亞洲藝術雙年展」での展示風景 2019 年, Tempered glass floor, ultraviolet light tube, neon lamp, raw material of cinchona tree, tonic water, multi-channel video. Dimensions variable, Courtesy of the artist

映像に驚いた筆者は、その場で「蚊が大きくてびっくりした」とメールしたところ、すぐに丁から返信[11]が届いた。添付されていた作品コンセプトを開くと、日本統治時代

[11] 2019 年 11 月 17 日、メールにて。当時、丁昶文はアルゼンチン政府から招へいを受け、ブエノスアイレスのアーティスト・イン・レジデンスに滞在していた。